北海道医歌人会詠草

鍵

滝川　村田（むらた）　英俊（ひでとし）

鍵かけずとも泥棒の来ぬ家に留守居のわれを鍵っ子と呼ぶ
若き日の日記めくればどの日々も鍵穴のぞいている気分せり
合鍵を持つ人誘う星々よ夜空に光る無数の鍵穴
友とわれマスターキーを持たずとも解除されゆく時間という壁
気づかずに心に鍵をかけてた時期（とき）ずっと傍に居てくれた鍵師たち

シウメイギク

札幌　浜島（はまじま）　泉（いずみ）

庭に散る秀明菊（シウメイギク）の花びらは　ピンクのサクラ葉白く彩る
庭の木に四十雀（シジフカラ）がと妻が言ふ　啄む果実なき松の枝
風ゆるく雪虫が飛ぶ丘の道　サイクリングの隊列が行く
小春の日緑地帯から桂の香　葉はすでに落ち裸木となるに
柿を買ふ　少年（せうねん）のころ木に登り霜かむる実を食みし思ひ出

夕闇の濃く

釧路　児玉（こだま）　昌彦（まさひこ）

いっときの目を楽しませ散り終える紅葉の木々寒き裸か身
早々と喪中の葉書届く中　新たな訃報　夕闇の濃く
夭折の友と重ねる老いの日々　人生とは何か人間とは何か
人間も遡上の鮭と変らずと終活に想う命のことわり
人生を卒業せんと名付けしか　卒寿の挨拶別れにも似て

高齢者とAI

北広島　古屋雅三知（ふるやまさみち）

AIはイノベーションと謳えども使いこなせぬ難民多し
解説書　読むに費やす長時間　解せぬ用語に悪戦苦闘
パスワード・ID番号入れたるも走らぬアプリ　如何ともせん
駅ネット　説明通りに入力し　最後で進まずまた最初から…
双六も斯くも非情に有らぬぞと　戻る振り出し　怒り心頭

小石丸の絹

函館　水関（みずせき）　清（きよし）

透きとほる大根の味　おでん鍋　出汁に染み出す煮出しの時間
己が身に　光を纏ふ枇杷の花　里山に来る冬を報せり
遠くではなく朝露や月影に　夢を見ること　今ここにいて
降る雪はたましひの繭　つぎつぎに　天上からの思ひ伝へる
ほそぼそと　桑食む蚕・小石丸　極上シルクになる糸を吐く

無線LAN

士別　竹内（たけうち）　幹夫（みきお）

つなぎても心届かぬ事もありプロトコールの文字やるせなく
人とてもつながらぬこと増えし今よきパスワードいかに探らむ
ルーターの灯りゆらぎて新たなる路を探すも手探りにして
新緑の木漏れ日揺れて設定の画面に落ちる心も揺れて
初夏の風窓を開ければ配線のからまりし日々過ぎゆくごとし